ADULT WOLF GUY 3

魔境の狼男

平井和正

NON NOVEL

アダルト・ウルフガイ
シリーズ 3

NON NOVEL

『ノン・ノベル』創刊にあたって

『ノン・ブック』が生まれてから二年一ヶ月、ここに姉妹シリーズ『ノン・ノベル』を世に問います。

『ノン・ブック』は既成の価値に〝否定〟を発し、人間の明日をささえる新しい喜びを模索するノンフィクションのシリーズです。

『ノン・ノベル』もまた、小説を通して、新しい価値を探っていきたい。小説の〝おもしろさ〟とは、世の動きにつれてつねに変化し、新しく発見されてゆくものだと思います。

わが『ノン・ノベル』は、この新しい〝おもしろさ〟発見の営みに全力を傾けます。

ぜひ、あなたのご感想、ご批判をお寄せください。

昭和四十八年一月十五日

NON・NOVEL編集部

NON・NOVEL—23

アダルト・ウルフガイ・シリーズ③　魔境の狼男

昭和49年9月25日　初版発行
昭和56年6月25日　25版発行

定価 680円

著者　平井和正（ひらいかずまさ）
〒177　東京都練馬区石神井台5-17-16

発行者　伊賀弘三良

発行所　祥伝社（しょうでんしゃ）
〒101　東京都千代田区神田神保町3-6-5
九段尚学ビル
☎ 03 (265) 2081

発売　小学館

印刷　堀内印刷　製本　明泉堂

万一、落丁・乱丁がありました場合は、お取りかえします。Printed in Japan
© KAZUMASA HIRAI, 1974

魔境の狼男

平井和正

アダルト・ウルフガイ
シリーズ 3

NON NOVEL

祥伝社

目次

1 リオの狼男 4
2 ライオン・ヘッド 54
3 竜の玉座 104
4 スルクの檻 143
5 復讐行 182
6 竜の基地(ドラゴ) 218
あとがき 255

カバー・本文イラスト……生頼範義(おうらいのりよし)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

1　リオの狼男

1

おれは冷汗をかいていた。おれはめったにただの汗でもかいたりしない。それが、この二十四時間というもの、全身を冷汗でぐっしょり濡らしているのだ。おれのことをキチガイみたいな糞度胸の持主で不撓不屈、象に踏んづけられてもけろりとしている脳天気な狼男と信じている連中が、いまのおれの有様を見たら目を疑い、ついで腹を抱えて笑いころげるにきまっている。

おれはファースト・クラスのデラックスな座席に大きな牡蠣のようにへばりついたまま、一昼夜飲まず食わず、トイレにも立たずにすごしているのだ。

眠りたいのだが眠れない。神経が針鼠みたいにささくれだっているせいだ。いっそ気絶でもしたいくらいだった。

とはいっても、べつに異変が急迫しているわけではない。それどころか異変の徴候もない。おれをとりかこむ状況はいたって平穏無事そのものである。

のんびりと気楽にくつろいだ雰囲気があるだけだ。科学技術の粋を尽くしたとかいう、厖大なメカニズムを詰めこんだ機体に、揺がぬ信頼を寄せた乗客たちが太平楽に構えている光景があるばかりだ。

おれだけが、なんの確信も信頼もなく、憂わしげな蒼い顔をし、汗をかいているのだった。

リオ・デ・ジャネイロへ向かうヴァリグ・ブラジル航空のボーイング七〇七には、かなり空席が目立った。

八月のリオは、がら空きのシーズンオフなのだ。有名なリオの気違い騒ぎ――カーニバルに、世界中から観光客の大群が押し寄せるのは盛夏の三月で、亜熱帯に属するリオは、いまが暦の上の真冬にあたるからだ。

したがって、ヴァリグ機内に観光客はすくない。東京発なのに、ファースト・クラスには日本人客はたった一

名――つまり、このおれだけだった。
日本・ブラジル間の航空料金は世界一高いのだ。そしてファースト・クラスともなれば、地球の裏側までの大名旅行である。もちろん自腹を切ったわけではない。そんなことはちっとも嬉しくない。それどころかおれにとってはどんな拷問よりも効き目のある地獄の苦しみだ。
長旅の終わりには、最大級の拷責がおれを待ち受けていた。
ガレオン国際空港到着の機内アナウンスが行なわれると、おれの胃袋の底には、拳大の氷塊が急速に結氷した。東京発以来、一度も倒さなかったシートにちぢこまり、固く締めた安全ベルトの金具にしがみつく。
リオの上空は快晴だそうで、他の乗客は小さな機窓に鼻をこすりつけて夢中で覗いている。思わず嘆声をあげる、夢のように美しい絶景かもしれないが、おれにとっては悪夢だ。
ボーイング七〇七が、ガレオン空港に向かって高度をさげ、トラフィック・パターンを旋回しだす重力の変化を感じると、おれの全身の血管から血がどこかへ消失してしまった。胃袋の氷塊が胸郭いっぱいに成長を遂げ、手足の先から冷たく痺れだした。額をべっとり濡らす冷汗が眉毛に流れこみ、チクチクくすぐった。
おれの体毛はことごとくワイヤーブラシの剛毛みたいに逆立ち、(想像上の)尻尾は、股の間にちぢこまった。負け犬の意気地ない悲鳴を漏らさぬため、歯が砕けるほど両顎を咬みしめた。
両眼を真円にみひらき、煮えたぎる熱湯に浸っているようにしゃちほこばり、安全ベルトの金具を生命綱のように死物狂いで握りしめているおれを、ブラジル美人のスチュワーデスは、同情するよりも噴きだしそうな表情で眺めていた。彼女がおれを、たいへんな臆病者と思ったところで、弁解の余地はない。いかに言葉を尽くして慰め励まし、ヴァリグの誇る機内食をすすめても、頑として応ぜず、不信と猜疑に凝り固まりシートにへばりついていたおれだ。
おれをとらえているのが、恐怖というより深甚な嫌悪だということを、おそらく彼女は信じない。これは感受性にかかわる問題であり、デリケートな狼男が、この空飛ぶ火炎瓶の怪物に抱く嫌悪のほどをいかに説明しても彼女は信用しないだろう。

おれはゴキブリと同じくらい、ジェット機という代物が嫌いだ。チクチク鳴っている時限爆弾のほうがまだしも好きになれる。おとなしく可愛いとでもいいたいくらいだ。

車輪が着地するショックがごつんと機体を突きあげ、フラップが鑢の鰭のように猛だけしく突き立ち、制動のためのジェット逆噴射の轟音がひときわ高まると、緊張をといた乗客はそっと溜息を吐きだした。

他の乗客が席をはなれ、通路をぞろぞろ移動しだしても、おれはシートにへたばりこんだままの醜態をさらしていた。

帰りは七〇七を背負って、南米大陸から日本まで太平洋を泳ぎわたったほうがましだ。

「ご気分はいかがですか?」

笑いを咬み殺していたスチュワーデスが、心配そうな表情を魅力的な顔に浮かべて歩み寄ってきた。心臓発作でも起こしたのではないかと気がかりになったのだろう。

おれは汗まみれになって、胃袋の上にかかった安全ベルトをいじりまわした。どうしてもベルトがはずれない。

おれの無器用さにあきれながら、手伝おうとしたスチュワーデスが、驚きの声をたてて手をひっこめた。

安全ベルトの堅牢な金具が無残にひしゃげ、変型していた。おれは苦しまぎれに馬鹿力を発揮し、ベルトの金具を掴みつぶしてしまったのである。

もちろん、人間のやることではない。

スチュワーデスは、疑惑と恐怖の色を青い目に浮かべ、茫然とおれを凝視していた。

2

リオの陽光のあまりの強烈さ眩さに、脳裡を白く灼かれて、われにもなくくらくらとめまいがした。地底の闇から急激に白昼の陽射しの中へ飛びだした、そんな感じだった。

リオの空は、底抜けに明朗に晴れわたっていた。水晶のように空気が澄みきっているのだ。

リオのとてつもない明るさ輝かしさは、日本のどぶのような汚臭をおびた空気を肺の底に溜めこんできたおれにとって、いささか衝撃的ですらあった。

たしかに、どぶから這いあがったのだ。おれはこれまで、日本という陰鬱な暗いどぶの中で溺れかけていたのである。とめどもない解放感が襲ってきて、過去二十四時間にわたる機中の苦しみを一挙に償ってくれた。

この半年間、おれの心を執拗にむしばんでいる憂悶の重みすら、リオの陽光にやわらげられ、軽減されていくようだった。

おれは目を閉じて生まれたての仔狼みたいに身を震わせ、それから目をあけるとタラップを降りて空港ビルへ向かった。鉛で固めた靴を脱ぎすてたように、突然足どりが軽くなっていた。

本来の自分を取り戻すというのはいいことだ。そのために、おれは地球を半周しなければならなかったのだ。

税関は、荷物がすくないのと、税関吏に摑ませた浮世絵ハンカチで簡単にパスした。

「ウタマロ！　ウタマロ！」

野暮な口髭を生やした大男の税関吏はにやりとして形式的に調べるふりをしただけだった。安物の浮世絵ハンカチを、よほどの値打物と思いこんだらしい。

おれにハンカチを渡して知恵をつけた男のいう通りだ。

南米の税関吏は、〈南米四悪〉の筆頭に数えられるほどで、賄賂を公然と要求するし、贈賄に応じないと極端に意地悪くなる。

他の旅客が徹底的にスーツケースの底まで検査されているところを見ると、抑圧的な軍事政権下のブラジルで

も、〈四悪〉の一は、あくまでも健在のようだ。――ちなみに〈四悪〉の残りは、警官・教師・兵隊だ。とくに税関吏は五年やれば大邸宅が建ち、一生食える有利な職業だとされている。

通関をすませると、空港の銀行に寄り、日本円をクルゼイロに交換した。レートは、一万円が百六十五クルゼイロだ。

銀行を出たときは、すっかりくつろいだ気分になっていた。自分のテリトリーを歩く猫みたいに図ずうしくなっていた。陰険な血走った目の監視がないのはいいものだ。おれには超能力とも呼ぶべき特殊な勘が備わっていて、見張られているときには、すぐにそれとわかる。首筋から背中にかけて、独得の異和感が生じるのだ。日本にいるときは、どこに行こうとその異和感がついてまわったものだ。

おれはくわえタバコの煙を悠然とたなびかせ、タクシー乗場へ歩いた。迎えが来ていてもおかしくないのだが、こちらから捜す気はしなかった。ひさしぶりの解放感を楽しみたかった。

背後から小走りの軽い靴音が近づいてきた。

「失礼ですけど、犬神さま……犬神明さまでしょうか？」

日本語だった。やや呼吸をはずませている。

「はい」

振り返ったおれは、犬神明は自分であると答えた。

「ああ、よかった。たいへん車が混んで遅れてしまって……お目にかかれないかと心配しました」

足音と声で期待した通りの相手だった。

とびきり長い脚は、見たこともないほど恰好がよかった。痩せっぽちといえるほど細身だが、これは優雅といい直すべきだろう。ぎすぎすした中性的な味気なさがこれっぽっちもないのだ。生粋の日本娘にはまず見られないプロポーションだった。

肌は陽焼けしたオリーブ色、発剌と表現するにふさわしい活気にあふれている。

黒い瞳が悪戯そうな光を宿し、やわらかい唇の両隅が、明るい笑いを含んで切れあがっていた。抱きしめて可愛がりたくなる衝動に駆られるほどだった。

ほっそりと肉のしまった顔にたたえられた微笑は、無類の愛らしさと親しみ深さがこめられていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

とにかく娘が小首をかしげておれを見ているさまは、むちゃくちゃに可愛かった。遊びを誘っている仔猫とか仔鹿に共通する、筆舌に尽くせぬ魅惑だ。幼児性の魅力は、この世に比類すべきものがない。だれでも磁石みたいに惹きつけられるのだ。

おれは反射的に（想像上の）尻尾を夢中でぱたぱたさせた。右手のスーツケースをおろすと同時に、左手で下唇にはりついたタバコを大急ぎでむしりとる。

「エリカ・フジタと申します」

彼女は右手をさしだしながら名乗った。指の先細りになった美しい手で、おれの骨張った掌をしっかりと握る。かすかに汗ばんでいた。手をはなすのが惜しかった。

「リオへようこそ。お出迎えにまいりました。三星商事支社へご案内いたします」

「それはどうも……」

エリカを眺めているだけで楽しくなってきた。生きる喜びを感じさせるのだ。こんな女の子には逢ったことがない。リオの陽光にみなぎる精気と等質のものだった。どす黒いスモッグで汚染された日本の大都会では、エリカのような娘は育たない。

「日本語がたいへんうまいですね」

と、おれはいった。

「二世なんでしょ？」

「ええ、ブラジレイラです。カリオカ——リオ生まれでリオ育ちのリオっ子です。日本へはまだ行ったことがありません」

エリカは、連邦大学の女子学生で、アルバイトに、三星商事リオ支社で通訳をやっている、といった。エリカの日本語は、日本の女子大生あたりに比べても、はるかにしっかりしていた。近ごろの若い日本人は、会話はもとより、まともな日本語を読み書きできない手合も多いのだ。

とにかく、通訳がついたのはありがたい。ブラジルは雑多な人種のルツボだが、国語はポルトガル語である。英語は大ホテルでもないと通用しないのだ。おれはにわか勉強で仕込んだ片言しかポルトガル語は喋れない。

「日本人が南米へ来て、一番頭にくるのは、アスタ・マニャーナという言葉です」

エリカは、悪戯そうにキラキラする瞳をおれに向けな

がら講義してくれた。
「また明日、という意味です。南米人は、アメリカ人や日本人のように勤勉ではありません。人生はのんびり楽しむものという享楽主義の持主なので、万事につけてたいへん悠長なんです」
短気な日本人は、アスタ・マニャーナが、「明日で間に合うな」と聞こえて、なおさらカッカとするそうだ、といい、エリカは朗らかに笑った。
エリカの運転してきた白いフォルクス・ワーゲンで、三星商事が手配ずみのコパカバーナのホテルへ向かった。
リオの印象は、官能ゆたかな美人といったところである。あけっ放しに陽気でロマンティックな美人だ。
リオ港は、サンフランシスコ、シドニーとともに世界の三大美港に数えられている。その通俗的な讃辞が、濃いエメラルドの紫をおびた海を見ると、さほど大仰でないとわかるのだ。
海と丘陵がせめぎあって、複雑な海岸線を描き、砂糖パンと呼ばれる白い奇岩を頂いた丘陵の下には、近代都市の高層ビルがひしめく。
コルコバートの丘のてっぺんからは、身の丈四十メートル近いコンクリート製キリストの巨像が、リオの市街やグアナバラ湾を見おろしている。この奇景が、〈リオの象徴〉だ。
ブラジル人というのは、大げさな事業が大好きで、インディオを除けば三人の住民しかいない〈緑の魔境〉と隣り合わせの奥地に、セメントから鋼鉄に至る資材を空輸して、新首都ブラジリアをぶったててしまった連中なのだ。
コパカバーナのホテル群は、白と黒の大理石を波紋状にモザイクした舗道ひとつを隔てて、整然と海浜に面している。法令で建物の高さを定められているのだ。リオは街の美観をなによりも大事にする。東京の気違いじみた街の醜悪さとは、まさに別世界だ。
真冬とはいっても、リオは南回帰線よりやや北寄りの亜熱帯に属しているから、砂浜には派手なビーチパラソルが咲き、波打際では褐色に陽焼けした若い男女が、サーフボードで巨波に挑んでいる。シーズンには十六マイルもの長い海岸が数十万の人間で埋め尽くされるという。

シーズンオフですらも、街中を超ビキニの美女群が闊歩しているさまは、壮観だった。
「リオが大好きになった」
と、おれはいった。
「だれでも好きになる。胸がワクワクしてきた」
「コパカバーナは、外人の観光客ばかりなので、美人はいません」
ワーゲンのハンドルを握っているエリカは平然と答えた。
「本場のカリオカ美人がご覧になりたかったら、イパネマに行かなければ。トンネルをひとつ潜れば、イパネマ海岸です。サンバの〈イパネマの娘〉ご存じ？　きっとお気に召しますわ」
例の悪戯そうな瞳でおれを見た。ちょっとだけイパネマへ寄ってみてはどうかとそそのかす。
「アスタ・マニャーナの精神だね」
おれは思わずにやりと笑った。
「残念だが、エリカ、僕はリオに遊びに来たんじゃないんだ。仕事がある。まず野暮用を先に片づけてしまわなきゃならない」
もちろん、エリカの誘惑にはおおいに心を動かされていた。たしかに、リオへ仕事をしにくるのは馬鹿者だ。人生の値打ちに気づかない大間抜けなのだ。
しかし、死んだほうがましという思いまでして、おれがリオへやってきたのは、可愛い娘と遊びまわり、人生を享楽するためではなかった。これほど忌いましい話はない。
とにかく、リオへ着くなりエリカのようなすてきな娘と逢えたのは幸運にちがいないと考えることで、忌いましさを多少減らすことに成功した。糞面白くもない三星商事支社員の真面目面に出会わしたかもしれなかったのだ。

3

コパカバーナのホテルでチェックインをすませ、荷物を部屋にほうりこむと、おれはふたたびエリカの白いワーゲンで、リオ市の中心部にある三星商事支社へ向かった。

リオ市内の交通渋滞ぶりは、悪名高き東京をすらしのぐ猛烈さだった。

貨物を積みすぎたトラックやバスなど大型車輛が多い。

びっしり詰まった大型車の間隙を縫って、小型車が荒らっぽく走りまわり、さらに場所をかまわず通行人がでたらめきわまる乱暴さで道路を横断する。

警笛を喚かせながら、車が人間を追いかけまわしている狂気の図だった。

交通整理の巡査が、交差点で通行人とのんびり立話に熱中していたりするので、無茶苦茶な交通麻痺が生じたりするのだ。日本ではとうてい考えられない。

悠長なことでは定評のあるブラジル人が、人間が変わったように殺気立ち、耳も聾するばかりに警笛を吠え猛らせている。

老朽車が多いので、騒音がひどく、排気ガスは真黒だ。こと車に関するかぎり、南米人には公徳心はなきに等しい。車同士の事故は、運転者が殴りあってカタをつけ、警官は袖の下次第でどうにでもなる。

人身事故を起こしたところで、補償はべらぼうに安い。最下層階級のインディオなど、わずか二百ドルでけりがつく。

なまじ半殺しだと、治療費と生活補償がかさむから、轢き直して止めをさすなどという極悪非道が平気で行なわれている。

おびただしい黒煙を傍若無人にひりちらしている大型トラックを追い越してやろうと機会を狙っているエリカを眺めながら、おれは、自分を地球の裏側まで運んできた〈仕事〉のことをおぞましい思いで考えていた。

つい十日前までは、夢にも思わなかったことだった。

十日前——

おれは、東京赤坂のホテルの一室で、三星商事から来た人物と会ったのだ。

年齢は三十代前半、長身で色白の好男子だった。

ホテル・ルームは、快適にエアコンが働いていたが、たとえ炎天下であっても、高級服を汗もかかずに着こなしそうな、一種の血の冷たさを感じさせる青年だった。物腰は爽やかに洗練され、折り目正しく、高価な男性用香料の香を漂わせていた。

一目見るなり、虫の好かない奴だとおれは決めた。おれは機嫌が悪かった。干からびた古雑巾のような気分だったし、どんな場合でも愛想のいい顔を見せたくない相手だった。

真夏の盛りで、おれときたら、動物園の狭苦しい檻にとじこめられたアラスカ狼さながらの異臭を発散しているというのに、青年は不屈の自制心をみせて、嫌な顔ひとつしないのだ。

二週間も風呂にご無沙汰しているのだから、劣等感を持たずにはいられない。

異臭をかぎつけたホテルのマネージャーが、顔色を変えて怒鳴りこんできたとしてもふしぎはないのだった。

おれはテーブルから名刺をとりあげ、〈三星商事・秘書課・板倉忠夫〉と刷りこまれた活字をうさんくさげに眺めた。

「お宅の用件というのは、だいたい察しがつく。郷子……石崎郷子の件じゃないのか」

「さすがですな。巷間の噂にたがわぬ明敏さでいらっしゃる」

おれにいいあてられて、板倉は端正な顔にうっすらと笑みを刷いた。やや肥り気味だが、切れ長の目をした美男だ。

「実をいうと、それくらいしか考えつかなかったんだ。天下の三星財閥とおれの間に成立する関係はね」

おれはあっさり白状した。

「すぐに見当がついた。つまり、郷子がどこかで蒸発したかなにかしたというので、おれを私立探偵がわりにやとおうというんだろう?」

「ご明察の通りです。なにしろ、あなたのきわめて特殊な人捜しの能力のほどは、たいしたものとうけたまわっておりますので」

「お宅のいう通り、その点にかけては、いささか自信がないでもない」

ほんのすこしだけ、謙遜してみせた。おれは人捜しにかけては、まぎれもない天才であって、超能力に等しい特異な勘の持主なのである。

「しかし、郷子というのは、気がむけば北極にでも出かける女だぜ。金と暇がありあまってるんだ。音信不通になったのは、なにもこれがはじめてのことじゃないだろう」

おれは、タバコのヤニで汚れた右手の爪に目を落とした。板倉の小綺麗にマニキュアされた爪とは雲泥の差だ。

「郷子のあのほうの趣味は知ってるはずだ。なにしろ石崎一族の猛烈なる鼻つまみなんだから」

「そのような風評があることは、敢えて否定しませんが、今回は必ずしもそうとはいいきれないようです」

「へえ？　厄介者が蒸発しちまったんで、石崎一家のお歴々はセイセイしてるんじゃないのかね？」

おれは、口の隅に突っこんだハイライトを喫るたびに踊らせながら、辛辣なことをいった。喫茶店のちっぽけな紙マッチで、指先を焦がしてタバコに点火する。

「色情狂の極道娘を厄介払いというわけだ。ほっとしてる人間が沢山いるだろう」

おれは煙を吐きだし、せせら笑った。

おれたちの話題を独占している石崎郷子という女について説明しておく。

郷子は、おれのたったひとりの親友だ。つきあいのはじまりは学生時分だから、かれこれ十数年来の旧友といってもいいだろう。

郷子は、三星グループの大立者の、名うての極道娘なのだ。三星財閥の創始者、石崎弥太郎の曾孫にあたる。

三星財閥はいうまでもなく、戦前、日本帝国主義の原動機として国家権力の手厚い保護を受けつつ、満州事変、日中戦争、太平洋戦争の過程において大発展した軍需財閥だ。

敗戦後、連合軍総司令部の解散命令を受け、約百四十の群小会社に分散、三星財閥の主力である三星重工業は、過度経済力集中排除法を適用され、東部重工・中部重工・西部重工の三社に分割された。

しかし、三星財閥は不死身の竜だった。細かく切り刻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb